

東北公益文科大学

総合研究論集

第27号

訳書紹介

ガブリエル・ターギット著、遠山茂樹訳

『図説花と庭園の文化史事典』

八坂書房、二〇一四年五月二五日刊、四六版 上製

三一九頁＋索引 xi 本体三五〇〇円＋税

遠山茂樹

二〇一五年一月二十三日発行

訳書紹介

ガブリエル・ターギット著、遠山茂樹訳

『図説 花と庭園の文化史事典』

八坂書房、二〇一四年五月二五日刊、四六版 上製

三一九頁＋索引 xi 本体三五〇〇円＋税

遠山茂樹

本書は *Gabriele Tergit, Flowers through the Ages, Oswald Wolf Limited, London, 1961* の抄訳である。

著者のガブリエル・ターギット（一八九四～一九八二）はドイツの作家、ジャーナリストだが、彼女についてはほとんど知られていないと思われるので、その経歴をやや詳しく紹介しておこう。著者は一八九四年三月四日、ベルリンに生まれた。本名はエリーゼ・ライフェンベルク。ガブリエル・ターギット（「ターギット」は英語読み）はペンネームである。ユダヤ系ドイツ人の父親はケーブル製造工場を経営しており、裕福な家庭に生まれ育った。「良家の子女」には珍しく、アリス・ザロモンの社会事業女学校に入学。入学と同時に託児所や実習先紹介所で働いたが、その間、女性運動に携わる人びとも交流をもったといわれる。その後、ジャーナリストを目指し、大学進学を決意する。

第一次世界大戦後、アビトウア（大学入学のための高等学校終了試験）を受け、一九一九年からベルリン、ミュンヘン、ハイデルベルク、フランクフルト・アム・マインで歴史学、哲学、社会学を学ぶ。ベルリン大学では二十世紀前半

のドイツを代表する歴史家フリードリヒ・マイネッケに師事し、一九二五年に代議士カール・フォークトに関する論文で歴史学の博士号を取得している。

十九歳の時、ベルリンを代表するリベラル系の大新聞 *Berliner Tageblatt* の折り込みに最初の記事を書き、一九二〇年以降、これまたベルリンの大新聞である *Kossische Zeitung* をはじめ各種新聞の文芸欄に記事を寄せている。一九二五年には *Berliner Tageblatt* の法廷担当記者として採用され、一九三三年まで同紙の編集部に所属し、数々の取材記事を書いた。この間、一九三一年には流行歌手ケーゼビアを主人公とした社会風刺小説『ケーゼビアはクーアフュルステンダムを征服する』を発表し、ベストセラーとなる。

法廷記者として、ヒトラーやゲッベルスも関与した事件のルポルタージュを書く一方、ワイマル共和国期の左派リベラル知識人の集まった雑誌 *Die Melusine* にも寄稿していたところから、ナチに敵視されるようになった。ゲッベルスはターギットを「卑劣なユダヤ人」と罵倒したという。

一九三三年三月四日、早朝三時頃、ナチの突撃隊がターギット夫妻の住むアパートの戸口の呼び鈴を鳴らした。すると夫がこう叫んだ。「開けるな！」^{ニヒトアウフマヒェン}のちに著者は、このひとことで救われたと述懐している。この日は奇しくもターギット、三十九歳の誕生日であった。身の危険を感じた彼女は、その日のうちにチェコスロバキア（当時）のプラハに逃亡、すぐさま夫も息子を連れてあとを追った。その後、同年十一月にパレステイナに渡り、最終的には一九三八年、ロンドンに移住した。ロンドンでは四半世紀にわたって亡命ドイツ語圏作家ペンクラブ・センターの事務局長をつとめ、数々の報告書や作家たちの自叙伝を編集・出版するかたわら、文化史研究にも従事し、著作を発表した。そのうちのひとつが本書である。

本書は彼女の後半生におけるベストセラーで、一九五八年に初版、一九六四年には新版が出され、英語、イタリア語、ハンガリー語、スウェーデン語にも翻訳された。とはいえ、この成功によって、著者である彼女自身や彼女のほか

の作品が注目されることはなく、亡命前と比べると、亡命後の生活は決して楽なものではなかったようである。ドイツでも忘れ去られていた著者が再び脚光を浴びるようになるのは、一九七〇年代後半になってからのことであった。一九八二年七月二十五日、ターギットはロンドンで八十八年の生涯を閉じた。ベルリンのポツダム広場にある「ガブリエル・ターギット通り」は、一九九八年、著者に因んで名づけられたものである。

本書は、ヨーロッパのみならず、アジア、アフリカ、中近東、東欧、南北アメリカといった多様な地域を視野に入れた空間軸と、古代エジプトから現代に至る時間軸に沿って、植物や庭園に秘められた歴史の数々をたどる。花の文化史であると同時に、文化誌でもある。たとえば、皇后ジョゼフィーヌとバラの話は人口に膾炙しているであろうが、バラが中世ヨーロッパの庭で栽培されたのは、その美しさゆえではなく、薬効のためであったという。事実、バラには豊富なビタミンCが含まれており、古来さまざまな病気の治療に使われてきた。ザンクトガレン修道院設計図の薬草園に記されている十六種類の植物のなかにバラが含まれているのも、そのためであろう。

また、スイレンといえば、モネの『睡蓮』を連想するが、古代エジプト人がこよなく愛したこの植物は、十九世紀末期のヨーロッパで大流行する。いやしくもさちんとした浴室であれば、スイレン模様のタイルで縁取りされていた。「ザクロがルネサンス、バラがロココの時代を象徴していたように、スイレンはオール・ヌーヴォーを象徴する模様になった」(本書二八八頁)。「ザクロがルネサンス」といえば、ボッティチエッリの『ザクロの聖母』を思い出す。「バラがロココ」と聞けば、誰しも優雅で甘美なバラとロココ美術を連想するにちがいない。そして「スイレンはオール・ヌーヴォーを象徴する模様になった。」といわれれば、スイレンの長い蔓とオール・ヌーヴォーの曲線美が重なり合う。スイレンの長く垂れ下がった蔓は十九世紀後半の舞踏会用のドレスに掛けられ、スイレンをあしらったペンダントも人気を博した。『睡蓮』を描いたモネが活躍した時代に、スイレンがもてはやされたというのも何かしら因縁めいている。

ともあれ、右に引用した一文にみられるように、時代を象徴する植物を直截に挙げていたあたりは、碩学マイネツケの下で歴史学を修めた著者ならではものといえよう。

一般にはあまり馴染みのない植物学者たちの生涯や、その素顔にふれることができるのも本書の大きな魅力のひとつである。十六世紀に活躍した植物学者マティアス・ド・ローベルは鋭い観察眼の持ち主であったが、植物の説明に際しては、古代のガレノスやプリニウスからの引用を繰り返していたという。ここには、もうひとつのルネサンスが垣間見える。随所にみられる本草書や花譜も興味が尽きない。

庭園についても本書から学ぶべき点は多い。一例を挙げよう。ジャン・ジャック・ルソーといえば、歴史の教科書では哲学者・思想家としておなじみだが、彼が埋葬されたエルムノンヴィルの庭は、庭園史の上ではフランス最初の風景式庭園として知られている。この庭の施主はジラルダン侯爵（一七三五―一八〇八）で、ルソーの友人にして後援者であった。彼はルソーの作品に心酔し、自分の子供たちもルソーの『エミール』に従って育てたというのであるから、筋金入りのルソー崇拜者といってよい。最晩年、ルソーはジラルダン侯爵の庇護を受けてエルムノンヴィルに落ち着き、そこで没した。

エルムノンヴィルの庭で興味深いのは、侯爵がこの庭をつくる際、フランスの風景画家ユベール・ロベール（一七三三―一八〇八）の絵画に倣って設計したという点だ。ロベールは画家であると同時に、フランス王室付きの庭園デザイナーでもあった。彼はイタリアで活躍した風景画家ニコラ・プッサンから着想を得て、プッサンの代表作と同じ題名の絵「アルカディアの牧人たち」を残している。プッサンは、グランド・ツァーでイタリアに出かけた英国貴族に大変人気のあった画家で、イギリスの風景式庭園もプッサンやクロード・ロランの絵画を模してつくられたことはよく知られているよう。

エルムノンヴィルの庭をデザインしたロベールがイタリアの風景画家ニコラ・プッサンに心酔し、ロベールの絵画を

みたジラルダン侯爵がそれを模した作庭を依頼したとしたら、イギリスのみならず、フランスの風景式庭園もイタリア絵画からヒントを得てつくられたことになる。「自然に帰れ」と唱えたルソーは自然を模した庭園に埋葬されたのであるから、文字通り、「自然に帰った」というべきか。

ルソーは植物にも造詣が深く、『植物学』なる著作も残しているが、本書にはエルムノンヴィルの庭でジラルダン家の子供たちに植物を教えているルソーの姿を描いた銅版画（モンモランシー、ジャン・ジャック・ルソー博物館蔵）も収められている。

ドイツ語の原著は、『ヨウラクユリと赤いシャクヤク花の文化小史』(*Kaisertron und Päonien rot: Kleine Kulturgeschichte der Blumen*, Köln/Berlin, 1958) の表題をもつ。訳者の手許にあるのは、一九六三年にクナウアー社から出されたポケット版だが、まことに「小さな大著」と呼ぶにふさわしい。このたびの翻訳に際しては英語版を底本としたが、必要に応じて当ドイツ語版を参照した。著者が本書を執筆したのは亡命先のロンドンで、すでに齢六十を過ぎていた。ナチの迫害を逃れ、終の住処として選んだロンドンで、いったいどのような気持ちでペンを執っていたのであろうか。ともあれ、本書は植物と歴史に関する著者の深い造詣に裏打ちされたエピソード満載の読み物であり、気軽に手にとっていたければ、幸いである。蛇足ながら、本書の邦題は出版社の意向による。

拙い訳書ではあるが、こうして世に出るにあたっては、多くの方々からご協力をいただいた。フナイン・イブン・イスハークや「純正同砲団の書簡集」などについては、シリア学の第一人者である高橋英海氏（東京大学）より貴重な教示を賜った。また、著者の略歴をまとめるにあたっては、気鋭のドイツ近現代史家である中野智世さん（成城大学）の惜しみない協力を得ることができた。お二人には感謝の言葉もない。また、原著に引用されている聖書、文学作品、哲学書のなかには、既に複数の邦訳が出されているものもあり、それらについては、手許にある限り、参看させていただいた。訳文は適宜改訳しているが、この場をお借りして、関係各位に厚く御礼申し上げます。

本書の刊行にあたっては、『プラントハンター東洋を駆ける』（二〇〇七年刊）、『西洋中世ハーブ事典』（二〇〇九年刊）同様、このたびも八坂書房編集部の三宅郁子さんに、一方ならずお世話になった。今回の仕事の依頼を受けたのは、二〇一〇年の春のことであったと記憶するが、生来の怠惰と浅学菲才ゆえに、本書刊行までに数年の歳月が経過してしまった。その間、折にふれて適切な助言を頂戴したうえ、原著にはない絵画、稀覯本、ボタニカル・アートなど貴重な図版を四〇〇点も取り揃え、掲載してくださいました。心より御礼申し上げます。もとより、本書に過誤や誤謬があるとすれば、その責任は一にかかって訳者にあることはいうまでもない。読者諸賢のご叱正を乞う。

最後になるが、訳業中の二〇一二年四月、恩師・小室榮一先生が永眠された。明治・大正・昭和・平成の世を生き、わが国における中世城郭史研究の礎を築かれた先生の学恩に対し、あらためて深謝の意を表する次第である。今は亡き令夫人・小室郁子様がいらしてくださいましたかいかいお茶をいただきながら、先生の書齋で過ごした四半世紀の歳月を、わたくしは決して忘れることがないであろう。

【追記】 本書は「朝日新聞」（二〇一四年六月二九日付）全国版「読書欄」で紹介記事を得た。この場をお借りして、関係各位にお礼申し上げます。